



～お葬儀屋さんのひとりごと～

もし家族に何かあったら・・・

第1章 死んでからでは遅すぎる

「親孝行したいときには親は無し」という諺があります。この諺は親を失ってみて始めて実感するものと言えましょう。生きているときは、煙たくうるさい存在であったかもしれませんが、亡くなってから「ああすれば良かった。」「海外旅行に連れて行ってやりたかった」「あの時、いうことを聞いていれば、親を悲しませずすんだものを」など、残された子供には、後悔のタネはつきないものです。

ではなぜ生きているうちに孝行が出来ないのでしょうか。それは一つには、自分が当分は死ぬことがないように、親も当分は死なないだろうという思いがそうさせているようです。親が元気なうちに孝行しようと努力している人はあまりいないようです。また病気になったらなつたで、「死」は考えるだけでも不吉なモノであるため、なるべく触れないようにしてきたためです。

そのため、いざ亡くなってしまつたと、もう取り返しがつかなくなります。最近では医学の発達によって日本人の寿命も伸びました。死亡原因ではがんや心臓病、脳血管障害などの割合が多くなっています。たとえばがん疾患の場合には、早期に発見されれば、何年も生きることが可能となりました。また末期がんであっても、それを告知されていれば、あらかじめ死までの年月を計算して、それまでにやり残したことなどをやることができます。

しかしそれには、患者本人とまわりの家族全員が、その病名と死までのおおよその期間を知っていることが必要です。残された命の限られた人が、本当にしてほしいこと、したいことを、家族が手助けするためには、両者の協力なくしてはむずかしいでしょう。

■ 最後のつめきり

〔神奈川県 女性 主婦 41歳〕

冷たい…。額も唇も耳も手も。寝たきりで痴呆の症状が重かった祖母が、死を迎えた。86歳。今から20数年前のことである。

当時、独身だった私は、母と交代で、祖母の看護に明け暮れた。

昼と夜の区別がつかない。夜通し大声でしゃべる。寝返りがうてないため、ひっきりなしに体を動かしてほしいと言う。痩せた体をさわると痛がるので、シーツを引っ張り、ころがすように位置を変えた。

日ごとに衰弱し、うつろな目だけが何かをさがすように動いていた。

そんなある日。久しぶり穏やかな顔の祖母が「お風呂に入りたいよー」と、つぶやいた。

私は、せめてお湯の感触だけでもと、布団の上にビニールを敷き、小型のタライを持ち込んだ。ぬるめのお湯に、そっと祖母の両足を入れる。むけた皮膚がパラパラと湯面に浮いて、赤味を帯びた足先が、ゆっくりと伸びた。石けんを泡立て、指を洗う。室中に湯気が立ち込め、石けんの香りが漂った。突然、「あー、いい気持ち…」と、祖母が言った。まるで、病気が治ったような声である。80年もの人生を、この小さな足で歩んできたのかと思うと、目の前がかすんできた。

その晩、遅く…。大きな息をひとつ残して、祖母は旅立った。安らかに眠る祖母の顔をなでながら、私は、死というものを静かに見つめた。ふと、祖母の足のつめが伸びていたことに気がついた。

足をさわると、まだ、あたたかい。顔を近づけてつめを切る。指の間から、かすかに石けんの匂い。小指で最後という時、ハサミを当てたところから血がにじんだ。あわてて薬をつける。

両足はだんだん冷たくなっていった。悔いのない別れであったと、今も思う。

